

書が作られたのです。初代学長は林毅陸ですが2代目・4代目は本間学長、3代目は小岩井学長でした。初めはお金が無いもんですからわずか100万円の基金。これは全部寄付金で賄ったと。この豊橋市の非常なご援助によってできた学校でありまして、1946年12月に予科の全学年の編入試験、それから翌1947年4月に学部の編入試験がありました。その4月期に私はここで試験を受けたわけです。

合格者の出身校は、同文書院が39%。他は海外・内地合わせて80校から多数の学生が集まりました。当時の校舎は、私今日見て回りましたけれども、昔の寮はありませんでした。窓ガラスは全部割れ、壁も至るところ崩れてるような状況でした。そこで急遽整備作業が行なわれて、1947年1月には寮生350名が収容できる寮が完成しました。私は法経学部に入りましたけれども、開学直後に予科1～3年、学部1～3年を持った旧制大学がここに成立したわけです。悪性のインフレと食料難が続いて、学生にとって厳しい毎日でした。しかしそういう中で学生は熱心に講義を受け、よく本を読み、日本の将来について真剣に議論をしました。この頃全学的な自治会が成立しました。1947年の末に全国有力私学の自治会、私学連が愛大で結成されます。その前年に結成された官学連に続くもので、1948年9月には私学と官学が合わさって全学連ができる。最近はある聞きませんが、ひと頃暴れましたね。あの全日本学生自治会総連合、全学連を作ったわけです。

ここまでで終わります。

【司会】 はい。どうもありがとうございました。時間が短くて貴重なお話が充分聞けないという点では本当にもったいなく思いますけど。どうしてもという方お1人おられますか。よろしいでしょうか。じゃあまた後半のほうで、ございましたらお願いいたします。先生どうもありがとうございました。引き続きまして3番目の先生ですね。奥

田先生であります。先生は朝鮮の京城にございました京城経済専門学校のご出身で、愛大27年卒という方でございます。愛大の法経学部経済学科を卒業されたあと、日本製鋼所に入られました。その後山歩きとかいろいろな生涯教育的な世界にずいぶん入られまして、そちらのほうのご著書もたくさん出されてるということです。では奥田先生、お願いいたします。

【奥田】 皆さんこんにちは。ただいまご紹介いただきました、京城高商におりました奥田でございます。今日はこんな高いところからお話させていただくようになります、大変恐縮いたしております。本日のシンポジウムは、東京支部の高井和伸さんを中心として、関東4支部の役員の方々企画立案されたものと伺っております。その趣旨は大変ご立派で、私共よりずっと後輩の方々がこのように愛知大学の生い立ちというか、ルーツを大切に思っていてくださることに対し、深く敬意を表したいと思っております。実は私事で恐縮ですが、最近ちょっと体調を崩しております、ここで話することを1度はお断りしたんですが、高井様のたつてのご要望で、その気迫と情熱にほだされましてお引き受けすることにいたしました次第でございます。今日のパネリストは海外からの引き揚げ学生ということで、海外各地、各校から選ばれたわけですが、朝鮮からの引き揚げ者で、愛知大学に入学した人は、私の知る限りでは四方先生の息子さんと城大予科におりました四方農君、京城高商で私と机を並べておりました前田耕造君、京城高工（これは高等工業ですけれども）から鈴木秀信君、それと私の4人ですが、四方君と前田君はもうすでに他界され、鈴木君は音信不明ですので、結局京城組で残ってるのは私だけということになったようです。正に余人を以って代え難しということで、どなたか適当な方にとお願いしたんですが、京組が1人も出ないというのは誠に残念だし、私が1人残っていたものですから、

○

京城代表として参加させていただくことになったわけですが。

京城からは、先生方は先ほどお話しした四方先生を始め、森田克己先生、戸沢鉄彦先生、松坂佐一先生といった大変著名な学者先生方がたくさん愛知大学に来られましたが、どういうわけかその割には学生は少なかつたようでございます。ここでちょっとお断りしておきますが、京城高商は当時正式には京城経済専門学校と言っておりましたが、今日のお話では慣れた言い方で京城高商と言わせていただきますのでご了承願います。

私が京城高商に入学したのは終戦の年、昭和20年の4月でしたから、在学期間はわずか5か月だけでした。その年の3月に徴兵検査が1年繰り上げて甲種合格となり、京城高商入学試験も合格で大変嬉しかったことを少し覚えております。高商に入学した時は、3年生は北朝鮮の工場へ学徒動員されておりました。当時朝鮮の産業分布ははっきりしておりまして、南朝鮮は農業・漁業といった1次産業、北朝鮮は鋳工業が盛んでした。鉄・セメント・化学肥料など、日本の産業資本の進出は全て光南、兼二浦、城津、清津など、すべて北朝鮮に集中しておりました。

学校にはまだ2年生がおりましたが、2年生も間もなく動員され、残っているのは1年生だけとなりました。当時は1年生は学徒動員に行かないということで、3年間のカリキュラムを1年間で学んだという触れ込みで、1学期は1年生、2学期は2年生、3学期は3年生と、授業はびっちり組まれておりました。私は先ほど申しましたように、高商入学の年の3月、徴兵検査を受け甲種合格となっておりましたが、学校へ行っても学徒動員もさることながら、徴兵召集でいつまで勉強していただけるか分かりませんでした。当時は理工系学生は徴兵延期になっておりましたが、文科系は延期になっておりませんでした。同じ京城高商に同じ下宿から通学していた同期の福岡出身の佐藤勝君というのがいました。彼は6月に京城竜山にある

朝鮮第23部隊に入隊しました。私は兵門まで見送って、兵営の中に入っていき佐藤君の背中を見届けました。その時佐藤君を見送ったのは私だけでした。あの時の気持ちは今も忘れることはできません。そういう時代でした。今残っている者はみんな8月に行くんだと噂されておりましたが、私にはついに召集令状は来ず、8月15日になりました。1学期の学期末試験が終わっても、夏休み返上で毎日軍事教練ばかりやっておりました。8月15日、その日も午前中は軍事教練をしていました。珍しくラジオ放送があるというので正午に校庭に整列しました。放送内容は聞き取りにくく、内容不明で理解できませんでしたが、終わると直ちに解散となりました。学校へ行ったのはそれっきりでした。

その年の暮れに引き揚げてきました。私は引き揚げ後内地の学校に転校したいと思いましたが、家庭の経済的理由の他に、当時内地の学校も戦争によるダメージで、海外からの引き揚げ学生を受け入れる余裕は少なく、門戸は狭かつたようです。転校は半ばあきらめて村の役場に勤めておりました。その時愛知大学設立、学生募集の新聞記事に出会いました。海外から引き揚げの教授・学生を中心にした新しい大学ができるという触れ込みで、一も二もなく飛びつきました。私の場合には、家庭の経済上の問題の他に、引き揚げ者という学習上のハンディキャップとかコンプレックスのようなものがありまして、何となく内地の学校の敷居は高いような気がしておりましたが、新生愛知大学ならそういうものを感じないで、同じ境遇の仲間だから安心して行ける学校だろうと自分で思い込んで、迷わず豊橋に馳せ参りました。

昭和22年1月、愛知大学創立と同時に予科1年に編入学しました。そこで図らずも京城高商1年で同じ5組だった前田耕造君とばったり再会したのであります。同じ学校と言っても学生数が多かつたので、同じ組以外の人とは交渉が少なく、ほとんど記憶にありませんが、前田君とは同じ組

で一緒に机を並べ、いつも同じ授業を受け、同じ軍事教練を受けていました。しかもさらに新聞部という部活も一緒にやり、特に親しく交わっていたのであります。そして8月15日、突然学校が無くなりました。みんなさよならも言わずに別れました。前田耕造君が鹿児島出身ということだけは知っていましたが、その後の消息は知る由もありませんでした。そこに前田君が突然現れたのであります。手を取り合って再会を喜び合ったのは言うまでもありません。卒業後前田君は学校に残り、学究の道を選びましたが、学半ばにして早世されたのは大変悔しい思いがしております。なおお余談ですが、私共は大学創立と同時に予科1年に入学し、旧制の予科3年、学部3年の計6年間、この豊橋の地で青春を謳歌しましたので、後にも先にもない一番長く豊橋で暮らした組ということになります。寮歌・逍遙歌に「沈潜ここに六星霜」とあるのは、この旧制6年制に由来するものであることは言うまでもありません。

印象に残っているというか、今日ここで1つだけお話ししたい授業として取り上げますと、経済原論という科目があつたんですが、京城高商では確か山口という副校長の先生の授業でした。講義内容はゴットルの経済学でした。ゴットルと言っても多くの方はご存じないと思いますが、私もあらためてこの度図書館で調べてみました。世界人名辞典にゴットルの名前を確認しました。こういうふうに書いてありました。簡単です。「ドイツの経済学者。経済学における個人主義的、自然科学的方法論を排し、社会構成体を中心として経済活動を考え、ナチスの時代に重んじられた（ここ大事なところです）。要するにナチスの経済学でゲルマン民族共同体の思想体系を支えたものだったようです。山口先生はそこから日本における戦時統制経済と、アジアの大東亜共栄圏、八紘一宇の経済理論を説くものようでした。これは極端な事例ですが、今思えば高等教育と言っても大なり小なり当時の国策に添う皇民教育だったの

ではないかと思えます。

さて一方、愛知大学に入ってから経済原論はどうだったでしょう。四方先生に学びました。四方先生はご記憶の方もいらっしゃると思いますが、いつも大学ノートの端っこがめくれたような、ヨレヨレになった古いノートを授業の時教室に持ってきていました。おそらく城大の講義でも使っておられたのを大事に持って帰られたものと思います。そこにはアダム・スミスやリカルドといった古典的でオーソドックスな、自由主義的な近代経済学が詰まっております。こんな古いノートを後生大事にして、進歩していないなあと思ったこともありましたが、いやちょっと待てよ、四方先生はゴットルの経済学ではなくアダム・スミスの経済学を戦前から戦後も一貫して説いてこられたんだ、立派なものだと、生意気に思ったりしたことを今思い出しています。

最後にちょっと大それたテーマを書いていますけれども、今まで私は先ほど来、京城高商の思い出話、高商でどんなことをしてきたかをお話ししてきました。でもお聞きいただいたように決して特別変わったことをしていたわけではありません。決して面白いお話でも耳新しいお話でもありません。ごくありふれた、戦争時代としてはどこでもそうであったような、内地の学校でも全く同じような学生生活を送っていたと思います。実はそこが問題だったと思うのです。私達は今でこそ海外引き揚げ学生だと言っていますが、当時朝鮮にいて、そこが決して海外だとは思っていなかったのです。日本と同じ、いや日本だと思っていたのです。しかしここは朝鮮人の国だったのです。日本はこの朝鮮人の国を併合して植民地とし、朝鮮民族に対して強引に皇民化政策を押しつけていました。創氏改名なんていうのはその象徴的なものだったと思います。町には内鮮（内地と朝鮮）一体のスローガンがあふれていました。この強制に対して強い民族的抵抗があつたのは当然のことです。



しかし、私達日本人は日本が朝鮮を植民地として支配しているということを、全く意識していなかったのではないかと思います。そういう自覚すらなかったのです。私達は被征服者の心情を推し量るところか、傲慢にもそれを踏みにじり、朝鮮人を日本人に同化しようとさえしたのです。人の足を踏みつけておいて、民族融和も内鮮一体もへちまもあつたものではありません。私は朝鮮にいましたが、正直言って何ひとつ朝鮮のことを理解しようとしませんでした。朝鮮の言葉を覚えようともしませんでした。朝鮮人のアイデンティティーなど爪の垢ほども思ったことはありませんでした。これでは朝鮮人の友人が1人もできないのは当たり前です。そして戦争が終わりました。その時ここは私達のいる場所ではないということ初めて自覚しました。

私は朝鮮から引き揚げ、愛知大学で民主主義の教育を受けました。そして日本の近代史を学びました。明治維新以後、日韓関係が非常に不幸な経過を辿ったことは皆さんもご承知の通りであります。日韓関係の歴史は日本近代史の1つの側面であるというよりは、明治以来日本が突き進んできた思想と行動の軌跡が、本質的にそこに象徴されているという意味において、正に日本の近代史そのものであると言わなければなりません。そのことの強烈な反省無しには、真の日韓友好はあり得ないと私は思っています。今日日韓双方のあいだで未来志向ということで友好に努力していますが、まだまだもちろん十分に癒されてるとは言えません。私達は若い世代の皆さんに託するより他ありません。それはアジアの友好と平和、この1点に尽きるのではないかと思います。愛知大学はその創立、生い立ちの経緯から見て、誠に稀有の大学であります。その建学の精神に立脚し、指導的立場に立って社会に貢献できるような大学であってほしいなと思っております。大変僭越ではございましたが、これで私のお話を終わらせていただきます。どうもありがとうございました。

【司会】 どうもありがとうございました。ご質問等ございますでしょうか。よろしいでしょうか。特に無いようでしたら後半のほうへまた持ち込ませていただいて。どうもありがとうございました。そうしましたら次は4番目の佐藤先生です。建国大学のご出身で、愛知大学にご入学されました。卒業後昭和25年に三和銀行に入られまして都内の支店長を経て、ニチイ株式会社取締役役に就任され、現在日中貿易会社を経営されています。現在でも本当にお忙しく日中間を行き来されておられます。ではよろしくお願いたします。

【佐藤】 私は建国大学に行っておったわけですが、建国大学はご承知かと思うんですが日本の大学ではございませんで、満州国、中国では今、偽満（ウエイマン）と言ってるんですけれども、満州国の大学です。従いまして学生も日本人が75名、その他、中国系、あるいは蒙古、朝鮮、白系ロシア、台湾、みんな入れまして1学年が150名。従いましてちょっと創立のいきさつから、学校の中の生活状況等、他の大学の皆さん方と違いますので、その辺をご紹介したいと思います。設立ですけれども、日本の大陸経営の戦略は、日清日露両戦役の勝利の結果取得した遼東半島を中心とした旧満州、現在の東北地区を主たる対象としております。中国清朝の衰退と辛亥革命（1911（明治44）年）による中華民国の成立、軍閥および中国共産党との内戦による疲弊と苦難にあえぐ国民政府を相手にして着々と満州の權益を拡大いたしました。やがて日本は、満州は日本の生命線だという認識に立って、柳条湖事件（1931年9月18日）を引き起こし、翌1932（昭和7）年には満州国を独立せしめ、清朝最後の皇帝溥儀を執政として迎え、さらに1934（昭和9）年3月1日に帝政を実施して溥儀を満州国皇帝として迎えたということでもあります。

これに対して関東軍および満州国政府は、国家